



TITLE:

北米東部インディアン研究の到達点とエンゲルス『起源』（1）

AUTHOR(S):

大西, 広

CITATION:

大西, 広. 北米東部インディアン研究の到達点とエンゲルス『起源』
（1）. 経済論叢 2003, 172(4): 1-19

ISSUE DATE:

2003-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/45589>

RIGHT:

北米東部インディアン研究の到達点と エンゲルス『起源』（1）

大 西 広

資本主義の歴史的位置に関する学説がマルクス理論であるとすれば、それは当然に前資本主義時代の歴史的位置付けをも含むものでなければならない。この意味で、マルクスが『古代社会摘要』で、またエンゲルスが『家族・私有財産および国家の起源』（以下『起源』と略）で先史時代の詳細な時代区分を提起したモルガン理論に注目したのは当然でもあり卓見でもあった。これにより、この分野がマルクス派理論が対象とすべき研究領域として確立をした。

しかし、にも関わらず一方では提起された家族の発生・発展仮説の正当性が疑われるようになり、また他方では20世紀における考古学の発展がモルガンの方法によらない直接的な古代社会研究をその主流に据えるようになり、モルガン＝エンゲルス理論が歴史研究者の関心から遠のくようになってしまっている。前者の例としては、鈴木 [1958]、森岡 [1958]、石川 [1970] などがあり¹⁾、後者の例としては、本稿で言及するインディアン考古学の発展がある。しかしもちろん、このことによって前資本主義時代の歴史的位置付けに関する研究がマルクス派理論の対象領域でなくなったわけではない。

したがって、問題はこの対象領域を現代の到達点からどのようにマルクス派歴史理論として再構成するかということになる。本稿はこの観点から、『起源』

1) モルガン＝エンゲルス説に否定的な欧米でのこの分野の研究史の紹介は、佐藤文明氏のインターネット上の論文「『家族、私有財産および国家の起源』をめぐる民族学史」および「『母権と父権』に沿って―江守五夫批判」に詳しい。<http://www2s.biglobe.ne.jp/~bumsat/B-lp.Ron2.htm> 参照。

がもっとも大きな関心を向けた北米東部インディアンの最新の研究成果を紹介し、マルクス派先史時代理論に迫られた課題を整理する。なお、考古学研究では家族形態に関する成果が乏しく、ここでは産業および階級・国家形成に関する課題に限定せざるを得ない。

I モルガン＝エンゲルス説の到達点

後に若干言及するようにエンゲルスがその理論の下地として利用したモルガンのインディアン研究は当時の全ての文化人類学的研究の成果を活用しえていたわけではない。が、実際にイロクォイ族インディアンの側で土地買収問題で戦ったために彼らの養子身分を与えられる程に彼らの信任を得、かつアメリカ学上院からも会員・会長職を託されるなどしたモルガンの研究は当時の最高の到達点と言えるものであった。その彼が提起しエンゲルスが従った先史時代の歴史段階区分は以下のようなものであった。すなわち、「天産物のさらに進んだ加工を習得する時代、本来の工業と芸術の時代」²⁾として定義される「文明」に先立つ「野蛮」と「未開」の時代はそれぞれ三つの小段階に区分され、次のような定義が与えられている。

「野蛮」：主としてできあいの天産物を取得する時代。人間の工作物は主としてこの取得の補助道具。

「野蛮の低段階」：果実・堅果・草木根を採集。言語を形成。

「野蛮の中段階」：水産物の採集と火の使用を開始。

「野蛮の高段階」：弓矢の使用による狩猟の確立。

「未開」：牧畜と農耕を習得する時代、人間の活動によって天産物の生産をたかめる方法を習得する時代。

「未開の低段階」：土器製作の開始。

「未開の中段階」：一般的には動物の馴致と飼育および植物の栽培³⁾。ただ

2) Engels [1884], 国民文庫版, 35ページ。

3) Engels [1884] ではこれが未開の低段階の標識と誤解されやすい表現となっているが、モルノ

し、自然条件の違いにより東大陸では家畜の馴致。西大陸では灌漑と日干煉瓦・石造建築の開始。

「未開の高段階」：鉄器製造の開始。

なお、「文明」開始の標識は「文字の発明とその文書記録への利用」となっている⁴⁾。この分類法は一見して分かるように「野蛮」の各段階は産業の発展に完全に依拠した分類となっているものの、「未開」の分類はモルガン自身もその困難性を認めているように、土器や建築物という非生産手段（建築物は生産手段ともなりうるが）であったり、東西大陸で標識が別にされていたりで単純さに欠ける。これがこの分類法を完全に踏襲したエンゲルス理論も含めて後に種種に議論される余地を生んだのであるが、ともかくこの分類法により北米インディアンが3段階に区別・分類されていたことが重要である。それによると、

- ・土器も植物栽培も知らなかった北西部族は「野蛮の高段階」
- ・トウモロコシやカボチャなどの栽培をし、木造家屋に住んだイロクォイ族などミシシッピ以東の部族は「未開の低段階」
- ・灌漑と日干煉瓦・石造建築を持っていたプエブロ族、アステカ、マヤ、インカの諸部族は「未開の中段階」

とされている。これが本研究の出発点である。しかし、この仮説が十分に成立するためにはモルガン＝エンゲルスの分類上、「文明」にならなければ国家が成立しないこと、「未開の高段階」にならなければ階級が発生しないという条件が同時に必要となる。実はこの時点で通常、国家や階級を持っていたと理解されているアステカ、マヤ、インカの諸部族が「未開の中段階」との分類でいいのかどうかという疑問が沸いてこよう。これは筆者もまたモルガン＝エンゲルスの分類を知った当初から持っていた疑問である。が、本稿が基礎に置こう

ゝガンの原文では中段階の標識と明記されている。

4) Engels [1884] では「表音文字の発明と……」となっているが、モルガンの原著では「石に刻まれた象形文字」も含まれるとしている。しかし、もちろん竹や紙に書かれた象形文字を石のそれより低く評価するのはモルガンの偏見である。

とするのはアメリカ考古学の発展による北米東部インディアンに関する知見である。また、その中でもモルガン=エンゲルスが分類のベンチマークとして用いたイロクォイ族などの位置付けは特に重要である。それではその新しい知見はどのようなものとなっているのであろうか。以下ではモルガン=エンゲルス説と逐次対応させながら Thomas [2000] の解説を基礎とし、それに矛盾しない限りで Coc, Snow, and Benson [1986], Snow [1976], Schneider [1989], Barnett [1998], Swanton [1998], Young & Fowler [2000] などの解説で補足し、それによって現代アメリカの北米東部インディアン研究の到達点を概観する。

II 渡峡以降北米東部インディアンの社会進化

そこでまずこれらアメリカ考古学の到達点によると、シベリアからインディアンの先祖たちがベーリング海峡を渡って北米大陸に達したのは氷河期=洪積世の少なくとも1万5000-2万年前のことであった⁵⁾。氷河期の海面の低下はベーリング海峡を地続きとし、当時マンモスやバイソン、カリブー、馬、ラクダ、剣歯トラなど大型獣を追ってシベリアから人類がやって来た。そして、彼らが現在のアメリカ合衆国地域に定着をするのが1万1200-1万200年前頃となる。ここで彼らはシベリア文化から区別されて「古インディアン様式 (Paleo-Indian Tradition)」を形成する。植物の根や果実や堅果などの採集も行うが、主には大型獣の狩猟を基本とし、15-20名程度の小さな群れとして半移住型の生活をしていたとされる。また、少なくとも1万2000年前には石の矢先を持った投げ槍を作っていた⁶⁾とされるから、モルガン=エンゲルスの分類では「野蠻の高級階」に既に達していたことになる。

しかし、その後、1万-8000年前頃の気候変動はマンモスなどの大型獣を死

5) Schneider [1989] ではこの数字は1万4000-2万5000年前と、Snow [1976] では1万5000-3万年前となる。なお、本節の解説はこの Thomas [2000] とともにこれら2冊の書物の叙述も参考にしている。

6) New Mexico の Clovis 遺跡での発掘による。

到る¹¹⁾。これらはインディアンの歴史段階で言えば、丁度「古インディアン様式」、「アルカイック様式」、「ウッドランド様式」にあたる。墳墓や国家・階級の出現が日本の場合その後の弥生後期まで遅れるが、それを除くと縄文期と「ウッドランド様式」には驚くほどの類似が見られる。また、後に見るように「ミシシッピ様式」という形で農業の本格的確立がメキシコという外部からの影響によったという意味でも類似性がある。日本の場合中国大陸からの米作の輸入であった。

したがって、我々が本稿で検討をしているインディアンの古代史研究はそれほど特殊なテーマではないと理解しなければならない。モルガンやエンゲルスはしきりに「東大陸」と「西大陸」との相違を強調するが、この「原アジア人」から出発したインディアンの歴史の多くは少なくとも「東大陸」の一部地域のものでもあったからである。

III 北米東部におけるインディアン国家

ミシシッピ様式カホキア遺跡における国家

したがって、以上のインディアン史の概観において重要なことは、原始的かつ平等な社会であったとされていたイロクォイ族の社会以前に国家と階級が成立していたということである。よって、このもっとも発達した国家を形成したミシシッピ様式を少し詳しく解説してみたい。ここでは、そのためにその典型として Thomas [2000] が挙げるカホキア (Cahokia) とスピロ (Spiro) およびマウンドビラ (Moundville) における国家形成について紹介する。

そこでまずカホキアであるが、これが花開いた時代は紀元800年頃から1350年頃であり、現在のセントルイスの対岸、イリノイ州東セントルイス地域にあり、筆者も実際にこの遺跡を訪れた。そして、この文化が「国家」をもったという考古学的証拠はやはり彼らの巨大な墳墓による。Thomas [2000] による

11) NHK スペシャル「日本人」プロジェクト [2001] 参照。

と「マウンド72」と呼ばれる墳墓には260人が埋葬されているが、その半数がその主君の臣下が犠牲となって埋葬されたもので、副葬品には海洋性の貝殻や銅（これは銅の精製によるものではなく純度の高い鉱石をたたいて成型したもの）や雲母を使った工芸品などがある。特に、この大きな墳の一部のひとまのりの埋葬部分には53人の若い女性と頭と手を切り取られた4人の男性の殉死体があり、またおそらく最高位の首長（lord）かその親族が埋葬されていると推測される別の部分には数千の貝殻のビーズ、400の矢、チャート石で作られた矢先、19のよく磨かれた石の工芸品、3人ずつの男女の殉死体が埋められていた。なお、これらの「部分」としての埋葬部は何重にも積み重ねられてひとつの墳をなしている。埋葬の回数毎に大きくなっていくという構造になっているのである。

また、この地域が「国家」として存在したことは、墳墓ではないにしても、宗教的意味合いを持った約百個のマウンド構造物が13平方キロの広さに広がり、1万人以上の人間が住んでいたこと¹²⁾、さらに木製の相当高い柵に囲まれた五角形の「都市部分」が発見されていることにも示されている。そして、その中でも最大級のマウンドは「モンクス・マウンド」と呼ばれる司祭用のマウンドで、エジプトの「グレート・ピラミッド」を上回り、メキシコの Cholula のピラミッドに迫る 316×241メートル（7ヘクタール）の広さを誇り、また一般のビルで表現すると10階建ての規模となる30メートル以上の高さを持つ。これは合衆国・カナダ地域では最大のものであるが、1回に18キログラムの土しか運べないバスケットで当時のインディアンがどれほどの労力をこの築造に費やしたかを想像しなければならない。相当の剰余生産物を可能にする生産力水準にあったことが分かる。

さらに、同じくカホキア文化を形成する近くの「スモール・テンプル遺跡」

12) カホキアの人口推計は1970年代から多くの考古学者によって繰り返されて来た。その最新の推計値は、Pauketat & Lopinot [1997] によると最盛期のローマン期で10218-15327人となっている。

減させて北方地域でのインディアンの生存を不可能とし、中心が南部に移行したインディアン社会は技術革新による小型獣の狩猟と採集を基礎とする「古代様式 (Archaic Tradition)」と呼ばれる新しい段階に進ませる。今から3000-1000年前頃まで続くこの時代に新しく獲得された技術はより鋭く尖らされた石の槍先やノコギリ型の刃型を持った石の槍先などである。また、肉を切り裂くためのより洗練された石の包丁やへら、石の挽き臼なども発明されている。臼の発明も堅果の食糧化を実現するなど大きな意味を持った。

これに続く時代は「ウッドランド様式 (Woodland Tradition)」と呼ばれる初期的農業の始まる3000年前 (BC1000年頃) からの時期である。この時期は、この ① 初期的農業とともに、② 特徴的な土器製造、③ 墳墓を含むマウンド (塚) の築造という3つの特徴⁷⁾を持ち、このうちの①、②は「未開」段階に進んだこと、あるいはその「低段階」ないし「中段階」に進んだことを示す。が、ここでのより大きな問題は③の特徴が含意する階級と国家の成立である。前述のようにエンゲルス仮説ではこの「ウッドランド様式」期以降に成立するイロクォイ族の社会が国家成立以前にあったことを主張しており、それと矛盾するからである。つまり、モルガン＝エンゲルスの時代分類では「未開の高段階」ないし「文明」に属する時代の特徴を「未開の低段階」と分類されたイロクォイ族社会が過去に持っていたことになる⁸⁾。これは学説上の矛盾であり正されなければならない。この社会の詳細な特徴は次節で展開する。

この「ウッドランド様式」は北米の東部全域に広く分布することになったが、その領域にはそれぞれ独自の自然条件があり、それはその後、西暦1000年頃から異なるいくつかの文化圏にと発展をすることとなる⁹⁾。まずは最も農業に適したミシシッピ流域地域およびメキシコ湾岸・東南部沿岸地域といった広汎な

7) さらに陶器の小さな立像を4番目の特徴とする定義もある。

8) ③の特徴を無視したとしても「未開の低段階」なのか「未開の中段階」なのかがモルガン＝エンゲルスの分類でははっきりしない。これは前節で述べた「未開」の段階区分の不充分性に関わる。アメリカ考古学の成果がエンゲルス仮説の再検討を要する問題のひとつである。

9) Snow [1976] では西暦700年頃からこの段階に入るとされている。

地域が「ミシシッピ様式 (Mississippian Tradition)」と呼ばれる川縁への定住型の高度な農業社会へと進む。「支配階級」のための墳墓はここでも維持される。また、プレーン地域では「プレーン・ビレッジ様式 (Plain Village Tradition)」と呼ばれ、農業とバイソンの狩猟とを混合させた独自の定住社会が成立する。ここでは支配階級の墳墓の築造は伝統として継承されていない。そして、最後に、これら地域では全体に北東部に位置するイロクォイ族地域とアルゴンキアン語族グループはそれぞれ、「イロクォイ様式 (Iroquoian Tradition)」と「アルゴンキアン様式 (Algonquian Tradition)」という様式を成立させる。ただし、この両様式はともに墳墓を持たないこと以外は「ウッドランド様式」と大きく異なる特徴を持たず、そのために Thomas [2000] では「イロクォイ様式」、「アルゴンキアン様式」を「ウッドランド様式」と区別した同じ著者も Thomas [1996] ではこれら地域ではウッドランド様式が存続し「イロクォイ様式」はその一部とみなすべきと主張していた。このことは「ウッドランド様式」を引き継ぐ四つの様式の間で「イロクォイ様式」や「アルゴンキアン様式」はより低い段階に属するものであることを意味する。この意味でも、モルガン＝エンゲルスの想定とは異なる考古学的知見が得られていると考えざるを得ないのである¹⁰⁾。

なお、ここまで説明をしたところで読者の注意を促しておきたいのは、この大きく四つに分かれた様式＝段階区分が日本列島におけるそれと酷似していることである。弥生人として主に中国大陆から高度の農業文明が渡って来るまでの日本列島はそもそも氷河期に地続きとなった北海道・本州地域にシベリアから渡って来た古日本人の島であったことを考えるとこれは当然のことであるが、初期には大型獣の狩猟を行い、それがその死滅から小型動物の狩猟へと方向が転じ、そこから縄文期には土器と初期的農業を持つ定住社会を形成するまでに

10) Morgan [1877] 及び Engels [1884] ではミシシッピ以東のインディアン諸部族ではイロクォイ族が最も高い発展段階であったと認識されている。Morgan [1877] 邦訳上巻34ページ, Engels [1884] 邦訳121ページ参照。

（1050-1100年頃に建設）はこの文化を他と区別する2つの小さな石の女神像が出土している。Coe, Snow and Benson [1986] に掲げられたこの片方の像は乳児を母親が抱いた形をしており、これが生命の再生産のシンボルとしてカホキア文化に一種の宗教的な凝集力を与えていたことを示唆している。このことをカホキア遺跡の巨大な宗教的マウンド群と合わせ考えると、カホキア文化における「国家成立」がかなり宗教的な凝集力を基礎としていたことが分かる。これは、カホキア遺跡発見者の Thomas Emerson の当初からの指摘であるが、宗教指導者卑弥呼をして初めて「倭国の大乱」を収めた日本の経験と類似している極めて興味深い。甲骨文字で占いをした中国の殷王朝とも当然に通じている。

ところで、最盛期にはミシシッピ・バレーにあるアメリカ中心部の少なくとも50のコミュニティを支配していたこのカホキア文化も1050年頃から衰退が始まり1300年頃にはほぼ完全に消滅してしまっている。この事情については「国家」成立の安定的条件を探る上で非常に重要なので次稿で改めて論じたい。

ミシシッピ様式スピロ遺跡における国家

こうしてカホキア文化が廃れても、ミシシッピ様式には他の中心地も存在し、紀元850年頃に勃興したスピロ文化は1450年頃まで継続している。これは現在のオクラホマ州北東部に存在し、ここでも高貴な人物を埋葬した「クレイグ・マウンド」と呼ばれる長さ120メートル、高さ10メートルの巨大な墳墓が存在する。紀元800年頃から築造が始まりスピロ文化が廃れる1450年頃まで築造が続けられたこの墳墓にも数カ所の埋葬箇所が含まれているが、たとえばその「セントラル・チェンバー」と呼ばれる箇所からは数百ポンドの貝殻の飾り物やビーズ、銅の皿、羽毛製の衣服、織物としての敷物やブランケットが副葬品として出土している。

また、ここで重要なのは高貴な人物は針葉樹で作られた「担架」に入れられて埋葬されていることで、この担架はその中にも貴重な工芸品や海洋性の貝殻

で飾られた鎧兜や真珠のビーズ、織物の外衣、銅の皿、籠が入れられて高貴な人物ほど大きなものとなることである。このクレイグ・マウンドには少なくとも13のこうした担架が埋葬されているが、その最大のものは小さなものの10倍も大きく、これを担ぐには4-8人の労力が必要となる。こうしてクレイグ・マウンドに埋葬された支配階級の中にも階層構造のあったことが予想されるが、別のマウンドの副葬品の質と量はこれより落ち、またマウンドの位置も異なってくる。そして最後に一般の平民の埋葬は地域毎にある小さな墓地に、しかもごく僅かの日用品の副葬品とともになされているという形でここでは社会の階層構造がピラミッド型に形成されていたことが窺われる。

さらに、先のカホキア文化と同様に重要なのはこの文化の影響下にあった地域の大きさである。Thomas [2000] によるとスピロ文化の支配者たちはブレーン地域から現在の合衆国南東部に到る広範な地域の交易を支配し、政治的な支配権の範囲もアーカンソー溪谷の2-300の小規模なセレモニー・センターに及んだとされている。特に重要なのは、宗教的儀式の様々な出土品に見られる絵はこの地が「汎南部的」な図解法のネットワークの中心地であったことを示しているということである。南北アメリカを通ずるインディアン文化の東大陸文化との最終的な発展段階の差は鉄器と文字の有無と一般的には理解されているが、言語の異なるこの「汎南部地域」の交易を可能にするための共通の図解法があったということは象形文字の原始的形態として興味深い。スミソニアン財団は早くも1879-80年に当時の北米インディアンの共通語としての手話の研究報告書を出しているが¹³⁾、この手話は絵文字とも一部一体化したものであり、1450年まで続いたスピロ文化の延長に位置するものと考えられる。音声として言語を統一することなしでも「形」に注目して異種言語の共通化を計るという漢民族と同様の過程が数千年の時間差を伴って開始されつつあったと理解することができる。文字の形成にとって異種言語間の意志疎通を強制する交易の意味の大きさとともに興味の絶えない現象である。

13) これは1881年に公開され、現在では Malley [2001] として入手することができる。

しかし、この都市も1450年には何らかの理由により放棄される。それ以前から、スピロ文化には長期の政治的な循環過程のあったことが Thomas [2000] では指摘されているが、最下位の地方的コミュニティレベルでは数千に及ぶ地域が一旦スピロの首長（王）の支配を受け入れたとしても、その死後には別の競争者が登場して政治的求心力が弱まると今度は宗教指導者の力が強まるなどといった循環である。この循環の末に何らかの理由でスピロは省みられることのない都市になってしまったのである。

ミシシッピ様式マウンドピラ遺跡における国家

「ミシシッピ様式」の中でもカホキア文化と同じ中分類である「中部ミシシッピ様式」に分類されるアラバマ州中部の遺跡にマウンドピラというものがある。これは紀元1050-1500年頃なので少しカホキアから時代が下がり、また規模も少し小さくなっているがひとつの地域的政治システムを形成していたことが窺われる。

この遺跡は名前にあるとおりマウンドの集積地として平らな頂上を持つ四角形の20の司祭を主目的とした「テンプル・マウンド」を有しているが、このマウンドは同時に高貴な人物の墳墓をも兼ねており、やはり殉死を伴う高貴な人物の埋葬が行なわれていて、銅、首鎧、絵画、石の円盤や方鉛鉱、雲母などの鉱石が副葬されている。特に、主なる埋葬者が全員男であることや子供まで含まれていること、その子供にも豪華な副葬品のあることはこうした貴族階級（noble）が世襲されていたことを示唆している¹⁴⁾。もちろん、他と同じくこれらのマウンドの建設には相当の労力が投入されており、それが彼らの地方的な政治権力の存在を意味している。特に、この埋葬のなされ方から神性を持ちかつ貴族階級の出身である首長、政治指導者層、第二水準の宗教指導者、平民といった4層の階層構造が窺われ、これら平民が貴族に食糧供給をしていた形跡が確認できるという。

14) ただし、Thomas [2000] によるとこの説には同意しない学者もいる。

また、ここで重要なのは、450年に及ぶマウンドピラの変化が農業社会の確立と共に進行したことが確認されていることである。紀元950-1000年頃にトウモロコシが導入されてそれまで野生植物に依存していた経済が一気に変化をし、貝殻のビーズなどの工芸生産が始まるとともに紀元1050-1200年頃には最初の2つのマウンドが築造される。さらに、1200-1250年頃には全ての主要なマウンドの築造がされるようになるとともに、街の防護柵が作られ、この柵内に移動した人口は1000人弱に及ぶ。世帯は核家族として構成されていたという。また、この時にはトウモロコシが食糧の65パーセントを賄うとともに、チャート石、グリーンストーン、雲母、銅、海洋性の貝殻などが遠方から輸入され、またそれらを加工する専門的な工芸人が登場をする。こうして農業生産の増大とともに余剰が拡大し、それを基礎とした分業と交易、それに階級社会の発達があった。陶器と放射性炭素の分析による時代考証によってここまで詳しい発展史の再現がなされているのである¹⁵⁾。

なお、以上の叙述における「国家」や「階級」との言葉はアメリカ考古学では必ずしも使用されているものではない。「国家」との表現は使用する研究者とそうでない研究者がともに存在し、「階級 (class)」の代わりに「階層 (rank)」との言葉が使用され、また「王」との言葉は出て来ない。が、考古学的研究だけでは「王 (オオキミ)」か「皇帝 (ミカド)」か地方的な政治権力者 (キミ) であるかの判断は困難で、よって “political authority” との表現に止まることは当然である。少なくともマルクス主義のカテゴリーにおいて「階級」や「国家」と表現できるものであることは疑いがない。

15) 「広義のミシシッピ様式」にはウッドランド期にホープウェル文化やアディナ文化を生んだオハイオ川沿いの「フォート・エンシェント (Fort Ancient) 文化」がある。Thomas [2000] が挙げるこの例としての「サーペント・マウンド (Serpent Mound) 遺跡」は墳墓を持たないが、フォート・エンシェント文化全体としては墳墓を保有している (Snow [1976] p. 78より)。この意味でこの小分類もある種の国家と階級は持っていたことが確認できる。

IV 国家形成に到る過程

ウッドランド様式における階級の発生

このようにして、紀元1000年頃から始まるミシシッピ様式における国家と階級の存在は疑うことができないが、この様式に到るひとつ前のウッドランド様式も農業の初期的発達によってやはり初期的な階級社会が成立をしている。ウッドランド様式はさらに共に現在のオハイオ州南部をその中心地とするその初期の「アディナ文化 (Adena Culture)」(Waldman [2000] および Snow [1976] では BC1000-AD200 年 期間, Coe, Snow & Benson [1986] では BC1100-AD400 年 期間) とその後期の「ホープウェル文化 (Hopewell Culture)」(Waldman [2000] では BC200-AD700 年 期間, Snow [1976] では BC300-AD550 年 期間) に別れるが、両者を併せて解説すると次のようになる。

まず、Waldman [2000] によると先と同じく階級の生成の基本的な指標となる墳墓の築造はアディナ文化のさらに初期段階における埋葬地への低い盛り土から始まっている。これが後に丸太で形どられた墓とその盛り土が次から次へと幾重にも重ねられることによってアディナ文化の後期には「墳墓」へと発展し、また通常は円形の形をした土の囲いで囲まれるようになる。また、これらの副葬品も多くの場合猛禽類の形をした石の彫刻、よく磨かれた石や銅の首飾、真珠のビーズ、雲母の飾り、石のパイプや骨のマスク、それに植物繊維から作られた編み物などと豊富で、やはり社会の不平等性が生じていたとされている¹⁶⁾。なお、マウンドの築造については、信仰対象とされる動物の形をした様々な宗教的なマウンドが墳墓に続いて作られるようになることも特徴的である¹⁷⁾。

16) こうした社会階層の生成については Coe, Snow and Benson [1986] でも主張されている。

17) この代表として Waldman [2000] に到る解説書は常に近くにあるサーペント・マウンド (Serpent Mound) を挙げている。これは100メートルの長さを持つ蛇の形をしたショッキングなマウンドで大変目立つものであるが、Thomas [2000] によるとこれはぐっと遅く少なくとも紀元1000年以降に作られたと推定されている。この解説の方が詳しく信憑性が高い。

さらに、Thomas [2000] では、ホープウェル期に大規模化した¹⁸⁾墳墓としてまずは紀元前100年-紀元400年頃に築造された少なくとも40の円錐形のマウンドを持つチリコッセ (Chillicothe) の遺跡が紹介されており、ここにも筆者は実際に行った。ここでは、それらの副葬品もアパラチア山脈の雲母、イエローストーンの天然ガラス、ノースダコタ・ナイフ・リバーからの玉髄、南大西洋の貝殻や鮫の歯、五大湖の銅とアディナ期より豪華なものとなっている。より具体的に見れば、火葬された4人の人物を葬っている「マイカ・グレイブ・マウンド (Mica Grave Mound)」は千の大きな光る雲母のあったことからこの名が付けられているが、ヘラ鹿や熊の歯、銅の飾り、大きな黒曜石の矢尻、五千の貝殻ビーズの貯蔵所があり、また3対の銅の枝角や熊の飾りのついたふたつの銅の冠、黒曜石の道具箱、蛙や鳥の形をした彫像のパイプ、人間の形をした銅の兜などの副葬品が発見されている。また、最大かつ最古の「デス・マスク・マウンド (Death Mask Mound)」では13人の埋葬者のうちの幾人かには隼の形をした銅の彫像が副葬されている。特にこの墳墓では当初地下にあった納骨堂が何らかの理由により後に表面に置き換えられており、よほど重要な人物ではなかったかと想定されている。これらの意味で社会階層区分もよりはっきりとしたものになったと Waldman [2000] は述べている。

また、近くの「サイプ・マウンド (Seip Mound)」遺跡のマウンドは大きなものが2基と小さなものが5基となっているが、これらは政治や宗教行事のために使われたものとされている。さらに、やや遠方であるが同じくオハイオ州の「フォート・エンシェント (Fort Ancient)」遺跡もまた宗教行事を主な目的とする約40ヘクタールの「村」として6キロメートルの長さの土塁で囲まれているから、これもまたかなり相当の剰余労働が少なくとも宗教行事に費やされていたことを表わしている。なお、このふたつの遺跡も筆者は直接に見学する機会を持っている。

18) Coe, Snow & Benson [1986] はこの時期の典型的な墳墓の大きさを高さが12メートル、長さが30メートルとしている。

とすると、こうした高度の文化を可能にした産業基盤はどこにあったのかということになるが、これについては Waldman [2000] はアディナ文化ではまだ狩猟採集が主であったものがホープウェル期にはトウモロコシ、豆を含む農業が産業のより重要なものになったとしている。しかし、より詳細な検討を行っている Thomas [2000] ではトウモロコシや豆の導入の相当前からカボチャ、テマリカンボク、ヒマワリ、アカザなど多くの作付け作物がこの地で開発され、トウモロコシや豆の導入はホープウェル文化の農業社会としての性格に大きな変化をもたらさなかったとしている¹⁹⁾。つまり、トウモロコシや豆がメキシコから現在のアメリカ南部地域を経由してやって来てはじめて農業社会を形成できたのではなく、農業社会を自らの力で成立させるに足るだけの発展段階に達していたことを示している。また、Waldman [2000] はさらにその地の動植物の種類と量の豊富さがアディナ期からの定住を可能としたと指摘している。その意味で、墳墓の築造と階級社会を始めたアディナ期にも後における農業の初期的発展の潜在力を認めることは重要であろう。

なお、ホープウェル文化についてどうしても補足しておかなければならないことは、その広域的性格である。現在の州で言えば南はルイジアナ州、ミシシッピ州から北はウィスコンシン州、ミシガン州、ニューヨーク州に到る地域に広がったこのホープウェル文化はそれらがひとつの「国家」として成立していた訳でないにしても、この地域内の諸部族が祭祀や競技などの目的で集まり、かつ政治的なやり取りをしていたと Thomas [2000] は主張している。また、この地域以上に副葬品の原産地は広域で、それらを集めるだけのネットワークを持っていたこと、そしてさらに Lepper [1995] の発見した「グレート・ホープウェル・ロード」という道路網などのネットワーク・システムの存在が重要である。この「グレート・ホープウェル・ロード」は約百キロメートル離れたチリコッセとニューアークを結びつける約1メートルの壁で囲まれた幅60

19) Waldman [2000] も Thomas [2000] も同年に出版の書物であるが、前者は旧版の改訂版であり、古い考え方の母斑を残していると思われる。

メートルの直線道路のことで、これはホープウェル中心地における様々な祭祀場を結びつける道路と同様のシステムがより広域に広がっていたことを示すものとされている。特にここで結び付けられた2つの都市にはともに八角形のマウンドがあること、18.6年サイクルの月循環の知識が記号化されていることなどを重視している。

ボバティ・ポイントにおける漁業国家

以上のようにして狩猟採集社会から農業社会への転化が階級と国家の形成にとって決定的に重要であることが理解できるが、それと同様に階級と国家の形成にとって重要な示唆を与えてくれるものが、現在のルイジアナ州北部に位置するボバティ・ポイント (Poverty Point) 遺跡である。これは時期的にも BC1730-1350年頃の遺跡で農業の形跡もないので「アルカイック様式」の一部と認識されているが、一方では「ウッドランド様式」の特徴である墳墓等のマウンド (それも最大で高さが20メートルに及ぶもの) を持ち、また1970年以降における Gibson [1974] の研究によりヒエラルキー組織をもった階層社会であったことが確認され、前農業社会でもそうした特徴を持てるものかと考古学上の重要問題となった遺跡である。この遺跡でもっとも特徴的なマウンドは直径が1300メートルにもなる6重になったC字型の同心多角形であるが、この周辺に位置するいくつかのマウンド群のうち「マウンドB」と呼ばれるマウンドの最下層にあった灰と焼かれた骨は重要人物の火葬後のものと推定されるからである。また、この遺跡が相当量の労力を必要としたこともここでの人口の多さを証明し²⁰⁾、その意味でも一種の「国家」と理解することができる。

しかし、一部の学者を除いて信じられているこの農業の不存在の下でどうしてこのような高度の文化²¹⁾を形成できたのであろうか。この点については、キ

20) Thomas [2000] によると、例えばここで最大規模の「ボバティ・ポイント・マウンド」には300万人・時間の労働が必要であったと推定されている。

21) 本文で述べた以外で重要な文化的特徴としては①出土品中の焼き固められた粘土のボール、赤鉄鉱の錘、沈泥製の像、碧玉のビーズ、ステアタイト片、石の矢尻、②ほぼ正確なマウン

ブソンの新しい研究を踏まえて Thomas [2000] がその隣接する川の逆流を利用した漁業の高生産性に注目していて興味深い。とりわけ、ここからアーカンソー川を320キロも遡ったところで産出される赤鉄鉱や磁鉄鉱（もちろん精製されたものではなく純度の高い鉱石）製の錘が魚網を改善し急流での漁を可能にしたことが重要である。これにより漁業可能な季節は長くなり、また広範囲な交易ルートが開発されたからである。また、この錘はある特定の諸家族によって発案されてコミュニティの全員に限らず利用したこと、それがこの社会の活力源であったこと、しかし漁業につきものの不運な不漁はその家族を幸運な家族の債務者としてそのマウンド建設の労働供給を担わされたこと、この錘の発案者やその競争者も他者にマウンド建設をさせる力を持ったことなどが主張されている。漁業につきものの運・不運も興味深いが、より重要なのはやはり技術革新が大量の余剰生産を可能にし、それが階級社会の基盤となったことであろう。「農業社会」でなくとも高度技術と自然条件のともなった「漁業社会」は階級と国家の基盤となりうると理解することができる。

なお、このポバティ・ポイント遺跡の発掘以来、前農業社会におけるマウンドの築造がアメリカ考古学の関心となる中で、1990年代になってルイジアナ州の四つの遺跡、フロリダ州の2つの遺跡がアルカイック様式期中期でありながらマウンドを持つことが分かった。たとえば、ルイジアナ州北東部のワトソン・ブレイク (Watson Brake) 遺跡は BC3400-3000年のものと時代測定されている。ポバティ・ポイントのすぐ近くに発見されたこの遺跡や西洋人接触時まで鮭漁による高度の階級社会を維持した北西海岸部インディアンは農業と並ぶ漁業の重要性を示唆していると理解することができる²²⁾。

ノド間の幾何学的配置、③ しかし陶器を持たなかったこと、がある。

22) Murdock [1968] は狩猟採集社会をかなり高段階の統合度を持つものにするひとつの重要な要因として漁労を重視している。なお、この例として挙げられているのが、北西海岸部インディアンとともに、アイヌ、ギリヤーク、カムチャダル族であるが、佐々木 [1983] は縄文時代人も広義のそれと主張している。

参考文献

- Barnett, J. [1998] *The Natchez Indians*, Mississippi Department of Archives and History, Natchez.
- Coe, M., Snow, D. and Benson, E. [1986] *Atlas of Ancient America*, Facts On File, Inc., New York and Oxford.
- Engels, F. [1884] *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats: im Anschluss an Lewis H. Morgans Forschungen*. (村井康男・村田陽一訳『家族、私有財産及び国家の起源』大月書店、国民文庫版、1954年)。
- Gibson, J. L. [1974] "Poverty Point, the First North American Chiefdom," *Archaeology*, Vol. 27, No. 2.
- 石川栄吉 [1970] 『原始共同体—民族学的研究—』日本評論社。
- Lepper, B. T. [1995] "Tracking Ohio's Great Hopewell Road," *Archaeology*, Vol. 48, No. 6.
- Malley, G. [2001] *Sign Language Among North American Indians*, Dover Publications, Mineola.
- Morgan, L. H. [1877] *Ancient Society*, Macmillan, London. (青山道夫訳『古代社会』岩波文庫, (上巻) 1958年, (下巻) 1961年)。
- 森 浩一 [1983] 「稲と鉄の渡来をめぐって」(森浩一他『日本民族文化体系 3 稲と鉄 ささまざまな王権の基盤』小学館)。
- 森岡清美 [1958] 「モーガン」(福武直他編『社会学辞典』有斐閣)。
- Murdock, G. P. [1968] "The Current Status of the World's Hunting and Gathering Peoples" in *Man the Hunter*, eds. by R. B. Lee and I. DeVore, Aldine Publish Co., New York.
- NIHK スペシャル「日本人」プロジェクト [2001] 『マンモスハンター、シベリアからの旅立ち』日本放送出版協会。
- 大西 広 [2001a] 「中国少数民族問題への経済学的接近——マルクス主義と民族問題」『政経研究』第75号。
- [2001b] 「日本型企业システムの変容と転換」(碓井敏正・大西広編『ポスト戦後体制への政治経済学』大月書店)。
- Pauketat, T. R. and N. H. Lopinot [1997] "Cahokian Population Dynamics" in *Cahokia: Domination and Ideology in the Mississippian World*, eds. by T. R. Pauketat and T. E. Emerson, University of Nebraska Press, Lincoln and London.
- 佐々木高明 [1983] 「稲作以前の生業と生活」(森浩一他『日本民族文化体系 3 稲と鉄 ささまざまな王権の基盤』小学館)。

- Schneider, M. J. [1989] *The Hidatsa*, Chelsea House Publishers, New York.
- Snow, D. [1976] *The Archaeology of North America*, The Viking Press, New York.
- Swanton, J. R. [1998] *Indian Tribes of The Lower Mississippi Valley and Adjacent Coast of The Gulf of Mexico*, Dover Publications, Mineola and New York.
- 鈴木二郎 [1958] 「古代家族」（福武直他編『社会学辞典』有斐閣）。
- Thomas, D. H. [1996] “Woodland Phase Indians” in *Encyclopedia of North American Indians*, ed. by Houghton Mifflin, Boston and New York.
- [2000] *Exploring Native North America*, Oxford University Press, Boston and New York.
- Waldman, C. [2000] *Atlas of the North American Indian*, revised version, Facts On File, Inc., New York and Oxford.
- Young, B. W. and M. L. Fowler [2000] *Cahokia: The Great Native American Metropolis*, University of Illinois Press, Urbana and Chicago.